



僕と藤田
の
知的な冒険

(その弐)

湖南徹

猫の目

僕は、藤田と一緒にテレビをボーッと観ていた。

最近のテレビ番組はつまらないというか、意味不明なのが多い。業界の内輪しか理解出来ないものを公共の電波で流している。

今となっては、ノイズメーカーとしてテレビを点けている、としか言いようがない。

「そろそろ寝る……」

「ニャーニャー」

と、外から猫の鳴き声が聞こえた。

「何だ？ 猫かな？」

藤田は肩をすくめ、

「『ニャーニャー』なんて鳴くの猫はだけだろ。少なくとも日本では」

「何故猫が……」

「ニャーニャー」

「ああ、うるせえ」

と、僕は呟きながら、サッシを開けた。外を確認する。

月夜だ。

夜なので暗いことには暗いが、月のお陰で遠くまで見渡せる。

道路のど真ん中に猫がいて、声を上げていた。闇の中で目が爛々と光っている様に見える。

「ニャーニャー」

「うるせえんだよ」

と、僕はぼやくと、空になったビール缶を投げ付けた。

猫の目02

単に脅すつもりだけだったが、自分のコントロールは予想以上に良く、また猫はかなり鈍かったらしい。

ビール缶は、猫の顔面を見事に直撃した。

「ギャーツ」

猫は悲鳴を上げると、弾かれた様に後方へぶっ飛んだ。

僕は満足して室内に戻った。

「猫が嫌いなのかい？」

と、藤田が何気なく訊く。

「ああ。猫、てさ、暗い中で目が光るだろ？ あれが薄気味悪くて」

「猫の目には、人間の目にはないタペタムという特別な層があって、それが光を反射する。目が光っている様に見える原因だ」

「そうだったのか」

「光を反射する、て事は、反射する光が全くなければ、猫の目は光らない事になる。だから、一筋の光もない場所に猫を放り込めば、猫の目は光らない」

「何故猫には光を反射する層があるんだ？」

「そりゃ、暗い中でも見えるように。タペタムはレフ板みたいなものなんだ。人間の場合、目に入った光は網膜に達すると吸収されてしまう。しかし、猫の場合、網膜の裏にタペタムがあるお陰で、網膜に全て吸収されず、残りは反射される。光を再利用出来る、て訳だ。再利用された光の中で、網膜に吸収されなかった分は外に出て行く。つまり、光って見える」

「だから猫は暗い場所でも目が利く、て言われるのか」

「ああ。猫は元々夜行性の動物だからね。暗闇の中では、人間の六倍は見えるらしい」

「そんなに見えるのか。じゃ、猫は人間より目がいい、て事になるな」

猫の目03

「あくまでも暗闇の中では、だ。猫は人間程色彩を区別出来ない。ある研究によると、猫は紫・青・緑・黄は識別できるが、赤系――赤・オレンジ・茶――は識別出来ないらしい」

「そうなのか」

「眼球には色を識別する細胞――錐状体――があるのだが、人間と猫を比較すると、猫は錐状体の数が圧倒的に少ないんだ」

「ほう。暗闇でもよく見えて、しかもあらゆる色彩を識別出来る様になれば、便利なのに」

「そんな上手い具合に進化出来たら苦労しない」

「それにしても、暗い中でよく見えるなら、飛んでくる缶くらい避けられると思うんだが」

「当たったのか。猫にもとろいのがいるんだらうけど……。大丈夫かな？」

「大丈夫だと思うけどな」

と、僕は呟くと、サッシを開け、外を確認した。「あっ」

「どうした？」

「猫が……」

「だから、どうした？」

「寝込んでる」

「……」

種ありバナナ

僕は、藤田と一緒にスーパーマーケットにいた。

最近、どの食品も値上がり傾向にある。金がない者にとっては、非買の商品サンプルが綺麗に――そして無意味に――並べられているとしか言いようがない。

果物セクションに入る。様々なフルーツが陳列されてあった。

ブドウ、ミカン、リンゴ、ナシ、スターフルーツ、ブルーベリー、アプリコット、レモン、イチゴ、キウイ、カキ、サクランボ、ランブータン、イチジク、メロン、ライチ、ラズベリー、パイナップル、グレープフルーツ、マンゴー、ドラゴンフルーツ、ドリアン……。

「お、スイカが売ってる。冬だ、てのに。最近、季節感、てのが全くないなあ」

と、僕は呆れながら呟いた。

藤田は肩をすくめ、

「国内の栽培技術が発達しているし、海外からの輸送技術も発達している。しかも日本では真冬だ、といっても南半球は真夏だからね。日本の季節感、といった狭い概念に縛られる必要はない」

「それはそうだが……。ちょっと寂しいよな。あ、バナナも売ってる」

藤田は苦笑した。

「バナナなんてどこでも、いつでも売ってるよ。最も売れている果物の一つだからね」

種ありバナナ02

「バナナ、て本来暑い地域のものなんだよな？」

「ああ。熱帯アジアが原産地だ。300種類くらいある」

僕は眼を丸くした。

「そんなにあるのか？」

「ああ。ただ、日本に入って来るのはフィリピンやエクアドル産のジャイアント・キャベンディッシュやグラネイン、台湾産の仙人種や北蕉種等、限られているが」

「種類がある、て言ってもなあ。皮を剥いて食べるだけだから、種類がたくさんあっても意味ないだろう」

「皮を剥いてそのまま食べる、つまり『生食』するのは日本や西洋諸国くらいなもんだ。生産国の熱帯アジアでは、バナナ、てのは調理して食べる。主食としている地域もあるくらいだ。日本ではバナナというと黄色や青を思い浮かべるが、原産地では桃色や紫色のものもある」

僕は頭を掻いた。

「バナナなんて甘いものを主食に出来るのか？」

「料理用のバナナは、無論甘みはあるが、澱粉や繊維質が高くて、どちらかというと言いたい感じなんだ。例えば、日本で食べられるバナナチップスは生食用のを使う為甘いけど、バナナ生産国のバナナチップスは料理用のバナナを使ったものが多い。ポテトチップスと同様、塩味なんだそうだ」

「塩味のバナナチップス？ 不味そうだ」

「芋みたいなものだから、塩味が合うんだ」

「そうかい。そういえば……」

「バナナ、て種がないよな」

「そうだな」

「何故種がないんだ？」

「種無しスイカと同じだ。人間が改良した結果、種がなくなったんだ。というか、バナナの場合、突然変異で出来た種無しのバナナが偶然発見され、それが栽培されるようになったらしいが。バナナを切ると、断面に黒い点みたいなものがあるだろ？ あれが種の名残さ」

僕は首を捻った。

「種がないのにどうやって栽培するんだ？」

「バナナ、て竹の子みたいなんだ。親株の茎の根っ子の脇から新芽が出てくる。それを上手く掘り出し、耕した土に定植すれば、一年半くらいでバナナが実る」

「増やすのに種を必要としない、て事か」

「観賞用のバナナの場合、種から育てるのが一般的だが」

「観賞用？」

「先程言った桃色や紫色のバナナとかだ。観賞用だから、小さくて、食べるのに適さない」

「それが種ありの――本来の――バナナ、て事かい？」

藤田は頷いた。

種ありバナナ04

「そうとも言える」

「どんなものなんだ？」

「皮を剥くと小豆大の種がぎっしり詰まっているらしい」

「そんなバナナ」

「……」